

〔資料紹介〕奈良の戦後雑誌（2）

『玄想 PENSÉE』の目次と主要記事解説（その1）

中嶋 優 隆・光 石 亜由美

要 旨

雑誌『玄想 PENSÉE』は、一九四七（昭和22）年三月から一九四九（昭和24）年四月にかけて発刊された文芸雑誌である。出版社は、奈良・丹波市町（現天理市）に所在する養徳社である。今回は、『玄想』第1巻第1号（一九四七（昭和22）年三月）から、第2巻第3号（一九四八（昭和23）年三月）についての、雑誌の概要、目次の細目、特集記事の解説を行った。

キーワード ①『玄想』、②奈良、③戦後雑誌、④養徳社、⑤プランゲ文庫

〔資料紹介〕奈良の戦後雑誌について

メリーランド大学蔵のプランゲ文庫によれば、戦後、奈良県で発行された雑誌は八四誌にのぼる。文芸雑誌、教育雑誌、同人誌などその内容はさまざまであるが、戦後の奈良の文化的、文学的土壌の豊かさを物語るものである。二〇二二年三月の『奈良大学大学院研究年報』（第27号）に掲載した「奈良の戦後雑誌（1）」『大和文学』の目次と主要記事解説」に引き続き、この資料紹介では、『大和文学』と同じ養徳社から発行された『玄想』の前半・第1巻第1号（通巻1号）から第2巻第3号（通巻11号）までを紹介する。後半の第2巻第4号（通巻12号）から第3巻第3号（通巻22号）は来年度、紹介する予定である。まず、一では雑誌の概要説明、二では編集者、発行所など雑誌の基本的な情報、目次の細目、三では特集記事の解説を行った。なお、特集は毎号企画されているわけではない。今回は特集が企画されている

第1巻第1号から第1巻第5号の特集記事のみの解説を行った。

目次の入力・作成、雑誌の概要説明は、中嶋が行い、特集記事の解説は中嶋と光石が分担して行った。解説の最後に担当者を明記している。

1 『玄想 PENSEE』 2023

『玄想 PENSEE』（以下、『玄想』）は一九四七（昭和22）年三月月から一九四九（昭和24）年四月にかけて養徳社から出版された総合文芸雑誌である。創刊号から二二号まで確認されている。

養徳社は、一九四四（昭和19）年に、出版社の統合整理の波をうけて、天理時報社出版部、甲鳥書林、六甲書房、朱雀書林、古書通信社が合併して設立された人文科学系の出版社である。戦後、東京復興の見通しが立たないなか、多くの学者や作家が養徳社を訪れたように、一九四五年からの二年間で七十点以上を刊行した。創設の経緯については『創設のころ 養徳社創立六十年』（図書出版・養徳社発行、二〇〇六（平成18）、非売品。なお、同冊子は養徳社ホームページで閲覧可能）を参照されたい。

『玄想』の編集委員を務めたのは、安藤直正、藤田秀彌、三村啓吉、吉岡武雄、庄野誠一、生駒藤雄、鈴木治である。また、中山正善（天理教真柱）が参加することも多かったようで、『玄想』刊行以後、編集会議は特に頻繁に行われるようになったという。創刊号の編集後記には、「思想こそ人間の偉大を形成する」というパスカルの言葉が引

用され、「文化国家としての出発をする」に際して「ほんの卑近なことからでもよい、紛れもない此の自分の眼で見、自分の耳で聞き、さうして自分の頭で考へたり判断したり反省したりする習慣こそ、此の日本を救ふものと言ふべきであらう」と述べられており、日本再建のために各人が先哲を知り、自らの思想を築くべきだというのが『玄想』の基本理念であった。掲載記事もこの思想と共鳴するものが多い。

表紙は毎号変わり、創刊号はグレコ、第1巻第2号（通巻2号）はゴッホ、第1巻第3号（通巻3号）はマチスと続く。通巻3号までは各画家の作品複製を表紙に糊付けしている。通巻4号〜5号（5号は入江泰吉撮影）、通巻15号〜22号（土門拳撮影）はモノクロ写真、それ以外の号は無地カラー刷りで表紙に目次が印刷されている。

誌面構成は、創刊号から第2巻第6号（通巻14号）までが巻頭にコロタイプを掲載し、その後文章を掲載している。コロタイプには西洋絵画や山水画、彫刻、能面などが短い解説とともに掲載され、文化的な色彩が豊かである。また、文章記事の寄稿者は学者や作家など多様である。戦後の養徳社には学者や作家が多く訪れたことを先に述べたが、そのような状況から生まれた誌面構成だと推察される。

なお、『玄想』についての詳細な解説については、『占領期の地方総合文芸雑誌事典』（金沢文圃閣、二〇二二年六月）の『玄想』の項目を参照されたい。

〔中嶋優隆〕

〈凡例〉

- ・引用に際して漢字は新字体に改めた。
- ・目次は雑誌の目次頁を採録した。本文と相違がある場合は注記した。

・目次の **↓** **〈○〉** の番号は、「三 主要特集の解説」の番号に対応している。

二 目次

第1巻第1号 (通巻1号) 一九四七〔昭和22〕年三月一日発行



【写真①】
『玄想』第1巻第1号表紙

編集者 安藤直正

発行者 岡島善次

発行所 養徳社 奈良県丹波市町川原城

支社 京都中京区蛸薬師室町西入

印刷者 岡島善次 奈良県丹波市町川原城 天理時報社

図版印刷社 天理真美館 奈良県丹波市町三島

頁数 64頁

定価 25円

表紙 グレコ (複製)

目次

特集・美について ↓ **〈1〉** 植田寿蔵「日常生活に於ける美」(2)・

井島勉「美について」(7)・「手の言葉 (口絵) : コロタイプ八面」・

金剛巖「能の美」(14)・岸田日出刀「建築美」(17)

「再生」問答 反射能 八木秀次・志賀直哉・坂西志保・辰野隆・安

岡正篤・川端龍子・桑木巖翼・下村海南・湯川秀樹 (45) / 鈴木大拙

「人間の智慧」(36) / 貝塚茂樹「漢の高祖」(30) / 市原豊太「年齢」

(40) / 詩 田中克己「夜半の寢覚」(39) / 句 高野素十「雉子笛」

(35) / 長谷部言人「人類学以前」(46) / 颯田琴次「発音どぼりの仮

名づかひ」(48) / 野間清六「趣味と生活」(50) / 姉崎正治「雲のう

るはしさ」(54) / 大澤章「ウムブリアの追憶」(57) / 岸田国士「宛

名のない手紙」(22) / 執筆者紹介 (45) / 編集後記 (63)

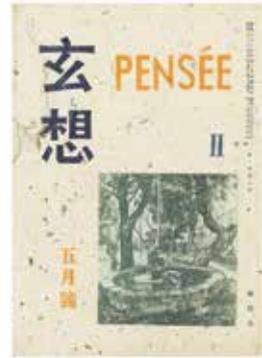
注記 *井島勉「美について」は、掲載ページでは「美について」図版に関連

して「」の副題あり。*「手の言葉 (口絵)」は、文章記事ではない。*市原

豊太「年齢」は、掲載ページでは「年齢」或る若い友に「」の副題あり。*

大澤章「ウムブリアの追憶」は雑誌箇所57〜62ページが欠。目次のみ記載。

第1巻第2号(通巻2号) 一九四七〔昭和22〕年五月一日発行



【写真②】
『玄想』第1巻第2号表紙

編集者 安藤直正

発行者 岡島善次

発行所 養徳社 奈良県丹波市町川原城

支社 京都中京区蛸薬師室町西入

印刷者 岡島善次 奈良県丹波市町川原城 天理時報社

図版印刷社 天理真美館 奈良県丹波市町三島

頁数 74頁

定価 25円

表紙 ゴッホ(複製)

目次

口絵・特集・道…コロタイプ八面…編集解説 井島勉(3) / 岸田
 国土「日本人畸形説」(11) / 西谷啓治「柳のしなへ」(32) / 湯川
 秀樹「知識と智慧とについて」(36) / **特集 嘘について** ↓ (2)
 辰野隆「嘘について」(39)・亀井勝一郎「嘘発見機」(40)・渡辺一夫

「嘘について」(42)・新村出「虚実漫筆」(46)・深瀬基寛「嘘の考察」

(49) / D・S・O通信(53) / 歌 結城哀草果「泉」(70) / 句 山

口誓子「春」(51) / 宮良当壮「石の屋根の人々」(54) / 野上素一

「ペトラルカの住んだ世界」(56) / 和辻春樹「理知性の貧困」(60)

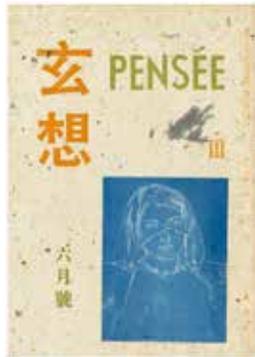
／最近の読書【書刀】 諸家(73) / 一番大事なものを【反射能】 諸家

(62) / ラブリュイエール 生島遼一「人間について」(64) / 寄稿家

紹介(61) / 編集後記(74)

注記 *岸田国土「日本人畸形説」は、掲載箇所では「日本人畸形説 宛名
 のない手紙二」の副題あり。

第1巻第3号(通巻3号) 一九四七〔昭和22〕年六月一日発行



【写真③】
『玄想』第1巻第3号表紙

編集者 安藤直正

発行者 岡島善次

発行所 養徳社 奈良県丹波市町川原城

支社 京都中京区蛸薬師室町西入

印刷者 岡島善次 奈良県丹波市町川原城 天理時報社
 図版印刷社 天理真美館 奈良県丹波市町三島

頁数 64頁

定価 30円

表紙 マチス（複製）

カット デュファイ（複製）

目次

- 口絵 特集 民家：コロタイプ：編集解説 藤島亥治郎／西田直二郎
 「歴史のゆくえ」（1）／伊吹武彦「観念分解といふこと」（24）／岸田国土「平衡感覚について」（16）／西洋文化と私の歩んだ道 鈴木大拙「明治の精神と自由」（6）・八木秀次「西洋理学との応接」（12）／詩 伊東静雄「風が目覚めて動いてゐる野を」（23）／句 水内鬼灯「草廬雑唱」（27）／**特集 躰について↓（3）** 大槻正男・島芳夫・和辻春樹・呉茂一・石田アヤ・宮城音五郎（28）／ラ・ブリユイエール 生島遼一「人間について」（58）／舶来待望【反射能】諸家（52）／頼原退蔵「表現の二重性」（44）／安騎東野「毛用獣」（47）／入矢義高「鬼神」（50）／豊竹古勒太夫「路太夫さんのこと」（39）／菊地一雄「巴里素描 絵と文」（42）／藤島亥治郎「民家雑草」（54）／寄稿家紹介（41）／編集後記（64）

注記 *鈴木大拙「明治の精神と自由」は、掲載箇所では「明治の精神と自

由―西洋文化と私の歩んだ道―」の副題あり。*八木秀次「西洋理学との応接」の掲載箇所には「西洋文化と私の歩んだ道」の記載あり。*岸田国土「平衡感覚について」は、掲載箇所では「宛名のない手紙」との併記あり。*菊地一雄「巴里素描 絵と文」は、掲載箇所では「巴里の素描―画と文と―」の異動あり。*ラ・ブリユイエール 生島遼一「人間について」は、掲載箇所では、「人間について2」と記載あり。

第1巻第4号（通巻4号）一九四七〔昭和22〕年七月一日発行



【写真④】
 『玄想』第1巻第4号表紙

編集者 安藤直正

発行者 岡島善次

発行所 養徳社 奈良県丹波市町川原城

支社 京都中京区蛸薬師室町西入

印刷者 岡島善次 奈良県丹波市町川原城 天理時報社

図版印刷社 天理真美館 奈良県丹波市町三島

頁数 32頁

定価 25円

第1巻第5号(通巻5号)一九四七〔昭和22〕年八月一日発行

表紙 (記載なし)

カット マチス(複製) 他

目次

戦後の精神風俗とデカダンス↓(4) 岸田国土「精神の健康不健康」

(5)・深瀬基寛「デカダン・転落・悲劇」(12)・木村太郎「デカダ
スのテオロジイ」(15)／ラ・ブリュイエール 生島遼一訳「人間に
ついて」(22)／武者小路実篤「生命を鳴り響かすもの」(19)／浦松
佐美太郎「山への情熱」(30)／我が親友「反射能」 諸家(26)／浅
野清「金堂の龍」(26)／宮良当壮「碇ヶ関の燕」(28)／寄稿家紹介
／編集後記

注記 *岸田国土「精神の健康不健康」は、掲載箇所では「宛名のない手紙
四 精神の健康不健康」の記載あり。*武者小路実篤「生命を鳴り響かす
もの」は、掲載箇所では「西洋文化と私の歩んだ道」の記載あり。*ラ・ブリ
ュイエール生島遼一訳「人間について」は、掲載箇所では「人間について」3
の記載あり。



【写真⑤】
『玄想』第1巻第5号表紙

編集者 安藤直正

発行者 岡島善次

発行所 養徳社 奈良県丹波市町川原城

支社 京都中京区蛸薬師室町西入

印刷者 岡島善次 奈良県丹波市町川原城 天理時報社

図版印刷社 天理真美館 奈良県丹波市町三島

頁数 32頁

定価 25円

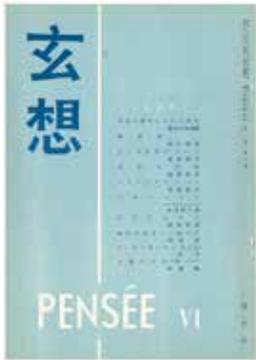
表紙 (写真) 入江泰吉

カット (記載なし)

目次

小泉信三「実学の精神」(12)／岸田国土「恐怖なき生活について」(5)
／ラ・ブリュイエール 生島遼一訳「人間について」(18)／寿岳文

編集者 安藤直正



【写真⑥】

『玄想』第1巻第6号表紙

第1巻第6号（通巻6号）一九四七〔昭和22〕年九月一日発行

書「これからの日本語」（28）／チャールズ・ラム 村上至孝訳「植生の宿もわが宿なりや」（30）／久保守「断想 模倣といふこと（並に絵）」（表紙の3）／磨めたいもの 残したいもの【反射能】（22）／わが愛読せし文芸【書刀】（27）

【5】内田巖・水野亮・嘉治隆一・藤岡由夫・芹沢光治良・吉植庄亮・芳賀檀・井伏鱒二・大口理夫・飯田蛇笏・長與善郎・関根秀雄

注記 *岸田国土「恐怖なき生活について」は、掲載箇所では「恐怖なき生活」について—宛名のない手紙 五—に変更、併記あり。*小林信三「実学」の精神は掲載箇所では「西洋文化と私の歩んだ道」の記載あり。*ラ・ブリュイエール生島遼一訳「人間について」は、掲載ページで「人間について」4の記載あり。*久保守「断想 模倣といふこと（並に絵）」は、掲載箇所では「断想 模倣について—（絵も）」に変更。

発行者 岡島善次
発行所 養徳社 奈良県丹波市町川原城
支社 京都中京区蛸薬師室町西入
印刷者 岡島善次 奈良県丹波市町川原城 天理時報社

頁数 48頁
定価 25円
表紙（記載なし）
カット ロタン（複製）

目次

長谷川如是閑「世界の歴史と自分の歴史」（6）／高山岩男「無題録」（32）／岸田国土「悲しき習性について」（18）／福田恆存「理想人間像」（13）／市原豊太「ユトピアについて」（24）／ラ・ブリュイエール 生島遼一訳「人間について」（44）／若い日の夢の行方【反射能】 諸家（48）／植田寿蔵「巴里の日本人」（38）／神西清「植物的あまりに植物的」（40）／井島勉「永遠の女性（口絵コロタイプ）」

注記 *本号より、目次も表紙に印刷。ただし、本号は目次のページもあり。右の目次内容はそこに依る。*長谷川如是閑「世界の歴史と自分の歴史」は、掲載箇所では「西洋文化と私の歩んだ道」と記載あり。*岸田国土「悲しき習性について」は、掲載箇所では「悲しき習性について—宛名のない手紙6—」の副題あり。*市原豊太「ユトピアについて」は、掲載箇所では「ユトピア

ア―渡辺一夫氏に〕に変更。*植田寿藏「巴里の日本人」は、掲載箇所ではタイトル脇に小さく「ひとりの在外者が、妻にあてた手紙、二十年も昔のバリダよりなど、面白いかどうか」という記述あり。*表紙目次および誌面には「若い日の夢の行方〔反射能〕諸家」が掲載されている。執筆者は、宮本百合子、新村出、中川一政、落合太郎、湯浅八郎、片山敏彦、石黒敬七、須田国太郎、久保田万太郎、吉川幸次郎、森於菟、久保田空穂、徳川夢声、颯田琴次、鳥養利三郎、石井柏亭、藤澤桓夫、石田一松、米川正夫。

第1巻第7号(通巻7号)一九四七〔昭和22〕年一〇月一日発行



【写真⑦】
『玄想』第1巻第7号表紙

編集者 安藤直正
 発行者 岡島善次
 発行所 養徳社 奈良県丹波市町川原城
 支社 京都中京区蛸薬師室町西入
 印刷者 岡島善次 奈良県丹波市町川原城 天理時報社
 頁数 48頁
 定価 25円

表紙・カット (記載なし)

目次

西谷啓治「道としての文化」(5) / 前田多門「文化の批判と撰取」(13) / 長谷川如是閑「世界の歴史と自分の歴史」(18) / 岸田国土「人間らしさといふこと」(44) / ラ・ロシユフコオ 進藤誠一訳「社交について 其他」(24) / 関根秀雄「我れ何をか知る」(30) / 浦松佐美太郎「信念の行方」(35) / 小林無二雄「きたなきもの」(38) / ハイネ 大山定一訳「運命のイロニイ」(40) / 上野照夫「自然の再構成〔コロタイプ口絵〕」

注記 *本号(第1巻第7号)より、目次は表紙のみに印刷。*前田多門「文化の批判と撰取」は、掲載箇所では「西洋文化と私の歩んだ道」の記載あり。
 *長谷川如是閑「世界の歴史と自分の歴史」は、掲載箇所では「世界の歴史と自分の歴史(承前)―思想言論機関の近代的改革―」と追記、変更あり。
 *ラ・ロシユフコオ進藤誠一訳「社交について 其他」は、掲載箇所では「省察録より(1)」の記載あり。*ハイネ 大山定一訳「運命のイロニイ」は、掲載ページでは「―独訳ドン・キホーテの序(1)―」と副題あり。*岸田国土「人間らしさといふこと」は、掲載箇所では「人間らしさ」といふこと宛名のない手紙(7)と変更、記載あり。

第1巻第8号（通巻8号）一九四七〔昭和22〕年二月一日発行



【写真⑧】
『玄想』第1巻第8号表紙

編集者 安藤直正

発行者 岡島善次

発行所 養徳社 奈良県丹波市町川原城

支社 京都市中京区蛸薬師室町西入

印刷者 岡島善次 奈良県丹波市町川原城 天理時報社

頁数 48頁

定価 25円

表紙・カット（記載なし）

目次

吉川幸次郎「森と海」(5)／坂田徳男「センスについて」(10)／武者小路実篤「人間の国」(16)／岸田国土「いはゆる教育について」(44)／ラ・ロシユフコオ 進藤誠一訳「嘘について」(39)／大沢章「山峡の道」(24)／永野爲武「正確といふこと」(30)／富成喜馬平「メランコリア」と「アテネの学園」(34)／ハイネ 大山定一訳「英雄

と市民」(20)／菊地一雄「物を造る喜び（口絵編集解説）」

注記 *本号は十一月十二月合併号。*武者小路実篤「人間の国」は、掲載箇所では「人間の国に就て」に変更。ハイネ 大山定一訳「英雄と市民」は、掲載ページでは「独訳ドン・キホーテの序2」の記載あり。*ラ・ロシユフコオ進藤誠一訳「嘘について」は、掲載箇所では「嘘について其他 省察録より(2)」と記載あり。*岸田国土「いはゆる教育について」は、掲載ページでは「一宛名のない手紙7」の記載あり。

第2巻第1号（通巻9号）一九四八〔昭和23〕年二月一日発行



【写真⑨】
『玄想』第2巻第1号表紙

編集者 安藤直正

発行者 岡島善次

発行所 養徳社 奈良県丹波市町川原城

支社 京都市中京区蛸薬師室町西入

印刷者 岡島善次 奈良県丹波市町川原城 天理時報社

頁数 48頁

定価 25円
表紙・カット (記載なし)

目次

岸田国土「歪められた「対人意識」」(40) / 野田又夫「自然と歴史」
(5) / 深瀬基寛「悲劇とヒューマニズム」(10) / 武者小路実篤「人間の世界」(16) / 寿岳文章訳「ブレイクのノートブック」(20) / 服部英次郎「異様な礼拝」(24) / 手塚富雄「恋愛における天才の孤独」(28) / 山室静「冬のおとづれ」(33) / ハイネ 大山定一訳「ロシナ
ンテと驢馬」(36) / 植田寿蔵「塔、石、家(口絵)」

注記 *野田又夫「自然と歴史」は、掲載箇所では「ルクレチウスをめぐって」の副題あり。*深瀬基寛「悲劇とヒューマニズム」は、掲載箇所では「一異教徒としての日本人」の副題あり。*寿岳文章訳「ブレイクのノートブック」は、掲載箇所では「ウィリアム ブレイク 寿岳文章訳 ブレイクのノート・ブック(1)」と、原作者名の追記、タイトルの追記あり。*手塚富雄「恋愛に於ける天才の孤独」は、掲載箇所では「クライストについての断想」の副題あり。*ハイネ 大山定一訳「ロシナンテと驢馬」は、掲載箇所では「独訳ドン・キホーテの序(3)」の記載あり。*岸田国土「歪められた「対人意識」」は、掲載箇所では「歪められた「対人意識」」について 宛名のない手紙9」に変更、追記あり。

第2巻第2号(通巻10号) 一九四八(昭和23)年二月一日発行



【写真⑩】
『玄想』第2巻第2号表紙

編集者 安藤直正
発行者 岡島善次
発行所 養徳社 奈良県丹波市町川原城
支社 京都中京区蛸薬師室町西入

印刷者 岡島善次 奈良県丹波市町川原城 天理時報社

頁数 48頁

定価 30円

表紙 (記載なし)

飾画 三岸節子

目次

岸田国土「風俗の改革について」(5) / 伊吹武彦「詩人と貝殻」
(13) / 渡辺二夫「下品恨」(17) / 林健太郎「一つの記録」(20) /
寿岳文章「ブレイクのノートブック」(26) / 姉崎正治「賢者の昼は
凡人の夜」(30) / 貝塚茂樹「東洋学の運命」(33) / 瀧川幸辰「断想」

- (37) / 嘉治真三「愛国心」(40) / 武者小路実篤「自由の国について」
 (45) / 菊池一雄「人間性の発見〔口絵〕」 / 飾画 三岸節子

注記 *岸田国土「風俗の改革について」は、掲載箇所では「―宛名のない手紙 完―」の記載あり。*渡辺一夫「下品恨」は、掲載箇所では「げほんこん」のルビ、及び「市原豊太氏へ」の記載あり。*林健太郎「一つの記録」は、掲載箇所では「―プロイセンの官吏の手記―」の記載あり。*寿岳文章「ブレイクのノートブック」は、掲載箇所では、著者名が「ウイリアム・ブレイク 寿岳文章訳」となっている。

第2巻第3号（通巻11号）一九四八（昭和23）年三月一日発行



【写真①】
『玄想』第2巻第3号表紙

編集者 安藤直正
 発行者 岡島善次
 発行所 養徳社 奈良県丹波市町川原城
 支社 京都中京区蛸薬師室町西入
 印刷者 岡島善次 奈良県丹波市町川原城 天理時報社

頁数 48頁
 定価 30円
 表紙（記載なし）
 飾画 福沢一郎・三岸節子

目次

大熊信行「思想の自由ということ」(5) / 阿部知二「南人 北人 文明の性格」(15) / 深瀬基寛「自然・孤独・社会」(20) / ウイリアム・ブレイク 寿岳文章訳「ブレイクのノートブック」(26) / 山内得立「驚き・疑ひ・絶望」(30) / 石田憲次「偉人の懐疑と孤独」(34) / 武者小路実篤「理想の国」(38) / リヒテンベルク 国松孝二訳「人間についての観察」(43) / 入江泰吉 口絵「お水取り」 / 飾画 福澤一郎・三岸節子

注記 *大熊信行「思想の自由ということ」は、掲載箇所では「個人と国家の諸問題」の副題あり。*阿部知二「南人 北人 文明の性格」は、掲載箇所では「南人・北人―ある文明論について―」と変更あり。*深瀬基寛「自然・孤独・社会」は、掲載箇所では「レオナルド・ダ・ヴィンチと池大雅」の副題あり。*ウイリアム・ブレイク 寿岳文章訳「ブレイクのノートブック」は、掲載箇所では「―3―」の記載あり。*石田憲次「偉人の懐疑と孤独」は、掲載箇所では「偉人の懐疑と憂鬱」に変更。*リヒテンベルク 国松孝二訳「人間についての観察」は、掲載箇所では「(1)」の記載あり。

三 特集記事の解説

〈1〉特集「美について」(第1巻第1号)

特集「美について」は『玄想』第1巻第1号(一九四七〔昭和22〕年三月)で企画され、植田寿蔵「日常生活に於ける美」、井島勉「美について―図版に関連して―」、金剛巖「能の美」、岸田日出刀「建築美」の四つが掲載された。本特集では、いずれの論者も〈美〉を日常のなかに見出そうとする姿勢が一貫している。以下に各論の概要を示す。

植田寿蔵(一八八六〔明治19〕―一九七三〔昭和48〕)は、美学美術史を専門とし、京都帝国大学教授などを歴任した。「日常生活に於ける美」の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約二〇枚である。日常生活で見出される〈美〉が論じられる。『世阿弥十六部集』で説かれた「離見の見」――役者が観客の視点で自分を想像すること――が紹介され、「小笠原流の作法」のような定型化した〈美〉だけではなく、日常の一挙手一投足においても〈美〉を判断する感覚が重要だとする。井島勉(一九〇八〔明治41〕―一九七八〔昭和53〕)は、芸術哲学芸術史を専門とし、京都帝国大学教授などを歴任した。「美について―図版に関連して―」の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約二三枚である。「美術家の視覚」があらゆる人間に可能なものであること、その一例として芸術家が「手」から「人間の生活」や「人間の感情や意志」を観察したことが説明される。なお、本文中に登場する芸術作品は、本特集掲載号の巻頭に図版も掲載されている。

金剛巖(一八八六〔明治19〕―一九五一〔昭和26〕)は、金剛家に生まれ能楽師シテ方として、戦後新様式の能を試みた。「能の美」の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約一三枚である。「さび」や「渋み」を日本的〈美〉と考えることを問題視する。これらの〈美〉は「軍国主義者達によつて唱導された神が、りの、独善的優越感」であり、「文化国家として再出発に臨む日本芸術の将来を誤る最も危険な考へ方」だと喝破している。

岸田日出刀(一八九九〔明治32〕―一九六六〔昭和41〕)は建築学を専門とし、東京帝国大学教授などを歴任した。「建築美」の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約二〇枚である。実用性と〈美〉の関係が論じられる。〈美〉は、実用性と両立しあうものであればこそ、日常生活を営む建築にも見出すことができ、戦後の再建にむかう今だからこそ、歴史的に美的な建築物以外の建築〈美〉を議論すべきだと主張している。

以上、特集「美について」を俯瞰した。いずれの筆者も権威づけられた〈美〉ではなく、日常生活の〈美〉に関心を寄せている。ところで、本特集の掲載号編集後記には「権威に依存すれば迷はずに一応救はれる」が、「己れひとりであり、苦しみながら、思索し、判断し、やつと辿りつくところに思想の内容がある」「完成された結論そのものは、むしろ思想の外殻である」とある。特集「美について」は、このような『玄想』の思想を〈美〉に着目して展開したものだといえよう。

〔中嶋優隆〕

〈2〉特集「嘘について」（第1巻第2号）

特集「嘘について」は『玄想』第1巻第2号（一九四七〔昭和22〕年五月）で企画され、辰野隆「嘘について」、亀井勝一郎「嘘発見機」、渡辺一夫「嘘について」、新村出「虚実漫筆」、深瀬基寛「嘘の考察」、執筆者不明の「U・S・O通信」が掲載された。本特集では、辰野、新村、深瀬が〈嘘〉を鍵概念として日本の歴史や精神性への批判を試み、亀井、渡辺は〈嘘〉と人間性について議論を展開している。以下に各論の概要を示す。

辰野隆（一八八八〔明治21〕～一九六四〔昭和39〕）は、フランス文学を専門とし、東京帝国大学教授などを歴任した。「嘘について」の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約五枚である。太平洋戦争に至った歴史的経緯を逆順に考えてみるという思考実験を通して、「平気で嘘をつく」日本人の国民性と政治が揶揄される。

亀井勝一郎（一九〇七〔明治40〕～一九六六〔昭和41〕）は、戦前には保田与重郎らと雑誌『日本浪漫派』を創刊。戦後は日本人の精神史研究に強い関心を寄せた。「嘘発見機」の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約七枚である。「嘘発見機」が発達した社会を検討することで人間が〈嘘〉をつく「自由」を論じる。〈嘘〉が無限に暴かれる一種のデイストピアのなかに、〈嘘〉と人間性の深い関わりを見出している。

渡辺一夫（一九〇一〔明治34〕～一九七五〔昭和50〕）は、フランス文学を専門とし、東京大学教授などを歴任した。「嘘について」の

分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約二〇枚である。冒頭から渡辺自身（のま）の経歴と矛盾する〈嘘〉の「告白」が示されるが、これは心中を「そのま」に表現したために〈嘘〉にはならないという。ここでの〈嘘〉は虚構としての意味を帯びており、虚構による真実の表現を試みたのである。

新村出（一八七六〔明治9〕～一九六七〔昭和42〕）は、言語学を専門とし、京都帝国大学教授などを歴任した。「虚実漫筆」の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約七枚である。〈嘘〉に関する俚言を切り口に、〈嘘〉を「宝」のように考える日本の精神性が戦後の「マコトの惨状」に結実したのであり、このような歴史を反省し、今後は「マコト」から出た「マコト」を学ぶべきだとする。

深瀬基寛（一八九五〔明治28〕～一九六六〔昭和41〕）は、T・S・エリオットを専門とし、京大大学教授などを歴任した。「嘘の考察」の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約一三枚である。日本の近代化は「宗教的信」としてのキリスト教的秩序を都合よく切断したために悲惨な戦争に至ったのだと批判されている。その反省として「嘘と信」が両立する社会の創造が課題だとされる。

以上、特集「嘘について」を俯瞰した。掲載号編集後記には歴史への反省と日本再建の必要性が説かれているが、辰野、新村、深瀬の主張はこれと共鳴している。また、「U・S・O通信」には「嘘」が「自分に限らない希望を与へてくれる」とあるが、〈嘘〉に積極的な価値づけを試みる姿勢は亀井や渡辺に通じるものである。〔中嶋優隆〕

〈3〉特集「躰について」(第1巻第3号)

特集「躰について」は『玄想』第1巻第3号(一九四七〔昭和22〕年六月)で企画され、大槻正男、島芳夫、和辻春樹、宮城音五郎、呉茂一、石田アヤの六つの文章が掲載された。それぞれの文章にタイトルは付されていない。以下に各文章の概要を示す。

大槻正男(一九九五〔明治28〕～一九八〇〔昭和55〕)は農業経済学を専門とし、京都帝国大学教授などを歴任した。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約九枚である。「躰」と「教養」は近い意味だが、躰は受動的であり、教養は自発的である。躰は「伝統的な既成の規範」に従うだけで批判性がなく、戦後の民主主義の発展を遅らす場合が多い。躰も時代に合わせ改変してゆく必要性があることを唱えている。

島芳夫(一九〇二〔明治35〕～一九八五〔昭和60〕)は倫理学を専門とし、京都帝国大学教授などを歴任した。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約六枚である。大部分の日本人は民主主義や個性の尊重と放任主義とを混同している。「独立した社会人」を作るためには家庭教育が必要であり、家庭の躰は個人を無視してはいけない。「独立した社会人」を作るために躰の内容を変更する必要があるとしている。

和辻春樹(一八九一〔明治24〕～一九五二〔昭和27〕)は科学評論家である。従兄は哲学者の和辻哲郎である。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約五枚である。躰はその人の教養・品格が表に現れ

るものである。「形式主義の不合理の修身の講義」や「日本人固有の伝統的礼儀作法」を教えるだけではだめで、「我々自らの品格を以てする真に教養ある言動」を実践することが重要である。

宮城音五郎(一八八三〔明治16〕～一九六七〔昭和42〕)は機械工学を専門とし、東北帝国大学教授などを歴任した。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約六枚である。躰には良い躰と悪い躰がある。いい躰はそのまま育ててゆき、民主主義に背くような躰は改めるようにして、「日本再建の軌道」に乗せることが急務であるとする。

呉茂一(一八九七〔明治30〕～一九七七〔昭和52〕)は、西洋古典文学を専門とし、東京大学教授などを歴任した。父親は精神医学者の呉秀三である。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約五枚である。戦後の新しい躰とは、「普遍性と恒久性」を有する「真実な価値に立脚」し、「美しい平和な秩序即ち世界をつくり出すべき構成員」が持つ「基本的な身構へ」でなければならないとする。

石田アヤ(一九〇八〔明治41〕～一九八八〔昭和63〕)は、教育者であり、父・西村伊作のあとを継ぎ文化学院の校長などを歴任した。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約六枚である。子供の躰は「誠意ある父と、母との協力」で行わなければならない。また、親や教師が子供に対して「誠意」を持ち、「率直に子供のたましひの独立性を尊重」することが重要であるとする。

本特集では、いずれの論者も封建的・伝統的・形式的な「躰」からの脱却を唱え、個人の品格・教養に基づいた躰の必要、個人の独立を

「涵養するような内実のある躰のあり方を重要視している。どの論者も躰を全面的に否定しているわけではない。戦後、民主主義社会の到来に合わせて、躰の内容を変更することこそ新しい日本国民にとって必要なものである」という意識が通底している。
〔光石亜由美〕

〔4〕 特集「戦後の精神風俗とデカダンス」(第1巻第4号)

特集「戦後精神風俗とデカダンス」は『玄想』第1巻第4号(一九四七〔昭和22〕年七月)で企画され、岸田国土「精神の健康不健康」、深瀬基寛「デカダン・転落・悲劇」、木村太郎「デカダンスのテオロジー」の三つの論文が掲載されている。以下に各論の概要を示す。

岸田国土(一八九〇〔明治23〕～一九五四〔昭和29〕)は、劇作家・小説家であり、代表作は戯曲「古い玩具」、小説「暖流」などである。「精神の健康不健康」のタイトルの前に「宛名のない手紙四」という見出しが付されている。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約二六枚である。戦後の世相は道義が「頹廢」しているとよく言われるが、突然、頹廢したわけではなく、それは文明の「爛熟」の結果である。十九世紀末の西洋文学にもデカダンと呼ばれる一派があったが、「デカダニスムの神髓」は「芸術の新生命の開拓」である。また、「精神の健康」とは「精神の自由」であり、「精神の自由」は不易なものである。しかし、戦後の「現在の日本のすがた」は戦争に敗れたことで「恥づべき徴候」を示しており、それはデカダンスではなく「精神

の不健康」な状態であるとする。

深瀬基寛(一八九五〔明治28〕～一九六六〔昭和41〕)は、英文学を専門とし、京都大学教授などを歴任した。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約一二枚である。西洋本来のデカダンとは「長期に亙る高度の文明の自己衰亡期に現はれる歴史の夕暮れの怪しい花」である。それに比べれば日本の戦後社会は「悲劇的な転落」に過ぎない。しかし、本来「悲劇」というのも人間が不合理な力に打ち破られ、その力を肯定する意識の「絶対の転換」が行わなければならない。日本の敗戦は本当の悲劇とはいえず、「精神改革」をもたらす「悲劇の誕生」こそ日本の課題であるという。

木村太郎(一八九九〔明治32〕～一九八九〔平成1〕)はフランス文学を専門とし、カトリック教会系の南山大学の教授などを歴任した。論文の分量は四〇〇字詰め原稿用紙にして約一四枚である。「S兄」に語りかける形式で、デカダンスの「哲学的」「神学的」の面を問題にしている。人間の文明は人間中心の古代から、神中心の中世、そして、再び人間中心の近代に移った。人間はもう一度「神中心」の世界に帰らないといけないとする木村は、デカダンスの特徴である「風俗の頹廢」は、「病める魂の問題」であるのでそれを癒すのは直接神と結びつく以外に道はないと唱える。

特集の趣旨説明の文章はないが、敗戦後の混乱した社会をどうとらえるかを識者に問うものであったようだ。岸田国土、深瀬基寛は西洋のデカダンスの知識を参照しながら、いずれも、日本の戦後社会のデ

カダンスの不徹底な状態と戦後精神の皮相性を指摘している。木村のみキリスト教的観点から、デカダンスを通じて「人間の霊の深淵」が覗けるなら、デカダンスにも意味があるとする。「デカダンス」という言葉の解釈を通じて、それぞれが敗戦後の日本のあるべき姿を語る特集となっている。

〔光石亜由美〕

〔5〕 特集「父と子の相似について」(第1巻第5号)

特集「父と子の相似について」は『玄想』第1巻第5号(一九四七〔昭和22〕年八月)で企画された。「青年時代には、一応父親の性格行蔵を批判し、反抗してきたやうな場合にも、不惑に近い年頃から、自づとわが身に父親との類似を認めるやうになり、今まで欠点として批判してゐたものをすら却つて肯定するやうになつたり、又その欠点故に父親の気持が漸く解り、敬慕親近の情を禁じ得ぬといふようなことが屢々ありますが、貴方の場合は？」という質問に答えるかたちで、一二人の回答が掲載された。回答者の傾向は大きくわけて、①若いころは父に反抗していたもの、②早くに父を亡くしてあまり記憶がないもの、③父に苦勞させられたエピソードを語るもの、である。

①については、洋画家である内田巖(一九〇〇〔明治33〕) 一九五三(昭和28) やフランス文学者である水野亮(一九〇二〔明治35〕) 一九七九(昭和54) は若い頃は父に反抗していたが、今は感謝し理解していると語っている。内田は叱られましたが、それは「人間の良識」の上からであったと父に感謝し、水野は牧師であるに反抗

して信仰を止める申し出たら、父自身も神主の家系に生まれ、両親や親戚の反対を押し切って牧師になったというエピソードを語っている。

②については、嘉治隆一(政治評論家、一八九六〔明治29〕) 一九七八(昭和53)、藤岡由夫(物理学者、一九〇三〔明治36〕) 一九七六(昭和51)、井伏鱒二(小説家、一八九八〔明治31〕) 一九九三(平成5)、長與善郎(小説家、劇作家、一八八八〔明治21〕) 一九六一(昭和36) が幼くして父親を亡くしている。嘉治は自分を「友達の間柄」のように育てようとした父に習い、自分も死ぬまで子供に学びながら修養してゆきたいと願う。藤岡は父の書きのこした「不平を言ふべからず」という言葉を心に刻んでいる。井伏もいたずらをして怒られた記憶があるが、子供を持った今、子供を叱る父の気持ちが変わるといふ。このように父の記憶は薄い、父から何かを学び取ったという回答である。

③は、父が天理教の伝導生活をしていたため祖父に育てられた芹澤光治良(小説家、一八九六〔明治29〕) 一九九三(平成5) や、政治家の父をもつ吉植庄亮(歌人、政治家、一八八四〔明治17〕) 一九五八(昭和33) である。しかし、芹澤は天理教を批判した小説を書いた際、寛大な態度を示した父に感謝し、吉植も父と衝突したこともあったが、父と晩年を一緒に暮らすことができた父との関係改善を語っている。

その他、芳賀壇(国文学者、一九〇三〔明治36〕) 一九九一(平成

3) は、父・矢一（国文学者）が「あまりに人間が誠実で、寛大で、あまりに純粹だった」ので、現代を経験しないで死んだこととはある意味「天の恩沢」であったのではないかと答えている。また、大口理夫（美学者、一九〇九〔明治42〕～一九四八〔昭和23〕）や飯田蛇笏（俳人、一八八五〔明治18〕～一九六二〔昭和37〕）のように、父と子は葛藤する運命にあるが、「父は究極のところでは子のために自己の一切を棄て、いゝと覚悟」している（大口）や、結局は「孝行をしたいころには親がなし」というのが「平凡なる真理」であるだろう（飯田）と普遍的な父親像・親子観を語っているものもある。

また、国文学者の父を「中々よいおやちであった」と回想するフランス文学者の関根秀雄（一八九五〔明治28〕～一九八七〔昭和62〕）や前出の長與善郎は、歳をとるとだんだん父に似てくるという共通の感想を述べている。

〔光石亜由美〕

付記 本稿は、科研費（研究番号16H03386）「占領期ローカルメディアに関する資料調査および総合的考察」（基盤研究B）研究代表者…大原祐治（千葉大学）の研究成果の一部である。

Abstract

Postwar Magazines in Nara (2)
Table of Contents and Main Articles of “Genso” (1)

Yutaka NAKAJIMA Ayumi MITSUISHI

“Genso” was a literary magazine published in Nara between 1947 and 1949. This article provides an overview of the journal, a detailed table of contents, and commentary on the special features (author biography, and commentary) on “Genso” .

Key words : ①Genso、②Nara、③postwar magazines、④Yotoku-sya、⑤special feature